氏 名 ・ 本 籍	野原　一徳（埼玉県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	乙第 52 号
学位授与の日付	令和 5 年 9 月 16 日
学位授与の要件	学位規則 第 4 条 第 2 項　該当者
論 文 題 目	卒業期女子学生に対する学生相談の寄与に関する研究
審 査 委 員	（主査）　教 授　富樫　公一
	（副査）　教 授　北川　恵
	（副査）　教 授　西　欣也
	（副査）　教 授　森　茂起（甲南大学名誉教授）

論文内容の要旨

本論文における研究の目的は、大学の卒業や大学院の修了が近づいた、卒業期における青年期女子学生の心理社会的発達を探究し、学生相談への示唆を得ることである。卒業期の青年期女子学生の心理社会的発達について、学生相談から見た卒業期の意味、親子関係における学生の対人関係および対象関係の変容、そして学生自身の体験様式が、女子学生の家族との関係性、とりわけ父親の存在や父親との関係性を中心に検討される。これらの検討をもとに、学生相談の面接構造および相談員の役割への示唆を提起する。

本論文の主要な研究方法は、学生相談での個別面接にもとづいた事例研究（第 4 章、第 5 章、第 6 章）であるが、文献研究（第 2 章）や量的研究（第 3 章）によっても議論を深める。これらの 5 つの研究を経て、以下の知見が得られる。

卒業期において、残りの学生生活が限られていること、そして大学生活終了後の社会的立場の変化に対して、馴染みのない世界に踏み出す不安や葛藤を抱くことがあり、親を含む対人関係の調整を行う場合がある。

親との関係は、つながりの感覚を確認しつつ探索しながら変容すると考えられる。加えて、女子学生によっては、父親は母親に比べて心理的な距離があり親密でないために、観察や思い巡らすことを通じて、父親の「わからなさ」を探索する過程がある。また、母親との関係および父親との関係性は相互に影響を与え、循環的に改訂されていく側面がある。

これらの過程には女子学生自身の体験様式の変容も伴っている。学生が自己や他者のさまざまな側面に対して情緒をともなって注意を向け吟味する過程のなかで、重要な他者である親からの適度に支持的なまなざしを学生が感じることは、安心感を促進すると同時に心理的な分離もまた可能にする。関連して、自己と他者との関係性や身体感覚などを反映する心理的殻と名づけられた表象が見出される場合もある。

学生相談への示唆として、まず学生相談の構造については、学生の卒業論文執筆や就職活動といった外的（現実的）課題と学生自身の内的課題との相互関係を考慮に入れること、学生の学生生活の終了に対する見通しが面接構造と密接に関連するために話し合うことが挙げられる。次に相談員の役割については、学生の外的課題に配慮しつつ、安心できる関係性を作りながら、学生の対象関係および対人関係をより明確かつ複雑に考えられることを意図する質問によって、学生の体験を拡張することが挙げられる。

審査結果の要旨

前項で述べたように，本研究では，卒業期における女子学生への支援に焦点を当て，質問紙調査および学生相談事例の検討の両者によって，その時期の女子学生の心理的，社会的課題の理解と，学生相談が果たすべき役割を検討している。

第１章，第２章は，学生相談の歴史を振り返り，「学生生活サイクル」という概念が提案され，学生相談における一つの参照軸として使われるようになった経過を概観しつつ，「卒業期」という本研究の対象の概念的妥当性とその有用性を確認する。そして，女性の就業率が低い時代に行われた過去の研究が，「分離や別れによる喪失」を強調したものになっていることを批判的に論じ，現在の心理的，社会的背景のもとで女子学生の「卒業期」の課題を新たに考察する意義を主張し，本研究を研究史の中に的確に位置付けている。

第３章の調査研究は，「学生生活サイクル」における各学年の特徴を実証的に検証することを目的としつつ，過去の文献で重要視されてきた卒業期における親との関係性の変化を検証するための概念として親に対する「視点取得」を調査対象とし，学生生活サイクルとの関係を検証している。その結果は，一部過去の研究結果を支持しながら，現在の学生にとって，学年差，男女差が必ずしも過去の文献が主張したように存在するわけではないという結果も含まれており，時代と学生の変化によって検証し直す必要性が実証的に示されている。事例研究による検討を中心としてきた学生相談研究により広い視野と実証データが必要であることを示す，意義深い研究の試みと見なすことができる。

第４章から第６章までは，著者が学生相談カウンセラーとして経験した事例を検討することで，卒業期の女子学生の心理的，社会的課題と，その解決過程を論じたものである。各事例の報告は，学生の課題を緻密に理解し対応するカウンセラーとしての著者の優れた力量を示すものであり，それぞれの議論と結論について高い評価が与えられた。特に，事例の進行過程で著者が見出した「心理的殻」の概念で括ることのできるいくつかの表象は，卒業期の心的課題と卒業，就職などの現実的課題を結びつけて理解するとともに，それらをめぐって学生とともに考えることで，新たな自己と具体的課題の理解をもたらすことを可能にすると思われる。

研究の全体を統合し，今後の学生相談の課題を論じる第７章も，過去の力動的心理学の理論的枠組みも参照しながら適切に論が進められており，充実したものとなっている。

その一方で，学生相談という大学の組織，活動の再検討という大きな課題が序章で提示されながら，各事例の検討を経た第７章の議論を経て，最終的にその大きな課題の中に位置づける作業がやや不十分であるために，全体の議論の筋が掴みにくくなっているという指摘も審査過程であった。この点については，講演会等の審査過程において，著者自身がよく認識していることが確認され，今後の課題としてさらに研究が続けられることが確認された。学生相談という日本の大学がアメリカ合衆国からの影響を強く受けながら独自に発展させ，各大学および学会において議論が積み重ねられてきた学生支援の仕組みを，大学教育における今後の学生支援の資源として活用する上で，著者の研究が一層発展して生かされることを期待されるという見解も，審査の過程で述べられた。

なお，本審査においては，本論文の第４章に相当する内容が，心理臨床学研究誌（日本心理臨床学会）に，第５章に相当する内容が学生相談研究誌（日本学生相談学会）に，それぞれ査読を経て論文として発表されていることも判断の参考とした。

人間科学専攻では，本論文の第一稿完成後に，複数の教員による綿密な事前審査および指導を行い，修正を経たものが 2023 年 4 月 28 日に提出された。その後，各審査委員の審査を経て，6 月 30 日に口頭試問において質疑を行った。続いて，7 月 8 日に公開講演会を開催し，その他の専攻教員も含めた口述試験を行った。審査員による最終審査会議を経て本報告をまとめた。

以上の審査結果を総合して，審査委員会では 4 名の審査委員全員一致で本論文提出者，野原一徳氏が，博士（文学）（甲南大学）の学位を授与されるにふさわしいと判定する。